

島田正治

そうこうしているうちにクリスマスも終り、はや新年、二〇〇七年を迎えた。ことしは三年振り、日本で個展を開く。その準備があるので一月末には一時帰国する。展覧会は四月下旬、東京銀座の文芸春秋社画廊、ここではもう何度も開いているから慣れてはいるが、そのつど緊張感はある。落度のないようにしなければならない。

最近思うことはどうも会場が狭すぎる。ギャラリーは一階二階とあって、日本的感覚でいくとむしろ広いほうといえるが、わたしには物足りない。もっともっと大きな壁面がほしい。ここへゆったりと作品を置く。狭い空間にびっしり隙間もないぐらいに並べるのは好きではない。絵を鑑賞してもらうにもかなり距離をおく必要がある。少し離れたところから見てもらわないとほんとうのものが見えてこない。とくにわたしの絵はどちらかというところきれいに描いた絵ではない。荒々しいまでに筆を紙面にぶっつけていく、そんな技法だから、余計そう思う。おとなしく描いてはタッチが生きてこない。絵が弱くなる。かつて、亡くなった作家の瀧井孝作さんは「強いものはみな美だ」と言われたが、ほんとうにそう思う。

こうなってくると、作品展示は美術館か、あるいはそれに匹敵する大きい空間の場所となる。どこかそういうところで展覧会を開かせてくれないだろうか。

メキシコでの展覧会はすでに二〇〇八年の七月、グアナファートのムセオ・プエブロ美術館で開くことが決っている。これはわたしのメキシコ描く四十年を記念、回顧してのものだ。特にこの地は最初メキシコを訪れたときから好きでよく描いてきたので、テーマはグアナファートにしぼる。

また、今住んでいるチャパラに近い、メキシコ第二の都市グアダハラ、サポパン美術館で展示の依頼があった。こうして、途切れることなく展覧会が開けるのは作家冥利につきる。まことにありがたううれしく思う。作家は展覧会開くことで制作もし、作品も向上する。作品展開かぬ人は作家でもないしまた伸びない。

新年早々、書き初めは「ゆっくり人生、コツコツ仕事」と書いた。何も急ぐ必要もない。ゆっくり、のんびりゆこうというのだ。これをひとつの目標とする。多くの人は生き方が不自然で理に即していない。無理がある。ストレスもたまって命も短くする。病気にもなる。死に急ぐの体(てい)となる。今日一日の暮らしを充実させる。朝は元気に目覚め、朝の食事もおいしく頂戴する。そして、自分のやるべき仕事をし、お腹を空して昼食、疲れたらひるねもよい。休むとしよう。そして夕方、夜を迎えねむる。毎日平凡かつ、あたりまえの一日の生活だが、これが最高と思う。何も思い患うこともなからう。きばりすぎない。悠々と生きる。素直に喜んで生きよう。

ご意見・ご感想はアルテ・シマダまでお送りください。